

同窓會會報

庶務部

幹事 中澤要實

昭和八年度幹事として私達六名が當選して事務に就いたのが五月一日であつた。因に新部長新幹事は左の如し。

庶務部長 鹽田義遜先生 會計部長 中條是明先生

辯論部長 松木本興先生 文學部長 今村是龍先生

運動部長 灘上惠教先生 購買部長 望月徳英先生

庶務部幹事 中澤要實君 辯論部幹事 末吉元敬君

文學部幹事 遠藤養宗君 購買部幹事 小野智好君

會計部幹事 松木龍宣君 運動部幹事 幡野存靜君

購買部助手 齊藤順義君

四月十一日 祖山に十年間教鞭をとられし永倉唯嘉先生一身上の都合により辭任せらる。常に私達の好伴侶となり鞭撻して下さつた先生を失ひし事は私達にとつては大なる不幸と云はねばならぬ、同日立正大學出身の丸山海照師學院書記として就任せり、同日灘上惠教先生新任同先生は學院出身にて、陸軍少尉にして寄宿舎の副舍監をも兼任さる、主として宗學、軍事教練を擔任さる。

全月二十八日 新入生歡迎茶話會を大客殿にて開催す、數人壇上に登り熱辯をふるつた。新入生は本年度六十名に垂んとす、遂年入學者が増す事は學院將來の爲非常に好ましき傾向である。

五月一日 第二十二回同窓會定期大會午前八時より開會議長松木先生、例年の通り前年度幹事の經過報告より質疑事項に入り次で舊幹事解任挨拶次に新幹事の就任挨拶豫算報告あり續いて希望案、緊急動議に入り議論百出盛會裡に四時閉會。

全月六、七、八の三日間 身延町にて道路布敷。

全月廿日 若月先生新任、主に國漢を擔任せらる。

全月廿五日 新部長就任す。

全月 稻田海素先生祖山の古文書拜見に登山、望月圖書館主事今村先生の幹施により學院講堂にて種々の新發見の事實について御講演があつた。

全月二十二日 日蓮聖人鑽仰の權藤中將が登山せられ私達學生の爲に大客殿にて「時局に就いて」との御講演を約一時間に涉つてせられた。

全月二十三日 前學院教授京都法華寺住職山口龍公師遷化につき弔電を發す。

全月二十七日 學院に十年間勸續せられし丸山顯孝先生は今般寺務の都合上教職を退かれた。大客殿にて先生の辭任挨拶あり、記念品を贈呈す。

六月一日 立正中學生小林教頭の引卒にて來山同窓會より中澤

小野兩幹事、高三より田島君驛まで出迎ふ。

全月二日 立正中學生を思親閣へ幡野、齊藤兩幹事にて案内す。下山後直ちに伊豆方面に向けて出發す、驛まで中澤、末吉兩幹事見送る。

六月九日 祖山學院春季修學旅行〔東京、中山、鎌倉、富士五山〕松木、灘上兩教授及丸山書記引卒にて出發、全員六十五名、〔運動部記事参照〕

六月十二日 旅行隊歸山、

六月十五、十六、十七日の三日間 身延驛にて道路布教、

七月八日 平本峯洞氏來山、大客殿にて甲賀流忍術に就いて各種の術を實演せらる。

七月十八日 立正大學講演部夏季布教にて登山、同窓會より中澤、小野兩幹事まで出迎ふ。

全月十九日 立正大學の講演部夏季布教を午前九時より中學校講堂を第一會場として二時余講演、小學校を第二會場として十二時より講演童話會が催された、同窓會幹事種々幹施せり。

全月二十日 立正大學講演部生徒諸兄出發驛まで見送る。

九月一日 柿沼勝孝先生新任、先生は日蓮宗大學出身にて哲學に造詣深き宗學者なれば慶賀の念にたへず。

全月一日 松井坊住職望月日賢師今學期より法要式を教授す。全月 文學部幹事遠藤養宗君病氣休學の後を受けて運動部幹事幡野存靜君文學部へ轉任、運動部幹事は次点葛原榮靜君都合に

より辭退せし故長谷川寛慶君就任せり。

九月二十日 學院卒業生佐藤海澄師遷化につき弔電を發す。

九月二十二日 山崎照道師來山、大客殿にて立正護國と題して講演せらる。

九月廿四日 福島先生御師範遷化につき弔電を發し並に香資を供へて弔意を表す。

九月廿九日 中山學林生徒諸君來山、齊藤購買部助手案内して奥之院、七面山に參拜。

全月三十日 大客殿にて中山學林生徒歡迎茶話會を催す。

拾月五日 卒業生田代榮正師晉山に付き祝電を發す。拾月中 姉崎正風博士來山新書院にてシカゴ萬國宗教會議並びに米國の現狀に就いて一時間半御講演遊ばされた。

以上極めて簡單に事業の經過を叙述した。なし來りし跡を見るに附け尙前途遼遠の感あり。然して成績上らずといへども幸に大過なく今日まで來りし事は偏に部長先生の指導と會員諸兄の後援の賜と深く感謝に堪へない所である。 以上

(尙本妙庵再興は來春早々との事なり)



辯論部

幹事 末吉元敬

腕力武力の時代は既に過去の夢となり、今や新しき人類の文化的創造の世界が我等の眼前に展開する時に於ては、腕力武力も最後の勝利者ではない。最も我等の頼みとすべきは思想信念の表現機關たる文章と演説であらねばならぬ。即ち大文章は現

在及將來に向つて爲す無聲の大演説を成すものであつて我々の社會を善良な理想的社會に導くものであろうが、然し複雑極り無き現代の社會に立つて只ペンのみを恃んで以て安閑として能事終れりと爲す事は、理想的共存共榮の社會建設へ努力する者の甚だ遺憾とすべきである。即ち機に臨み變に應じて社會の邪惡と戦ふべき三寸の舌を働かすべきだ、然り、雄辯こそ現代社會に活躍せんとする者の最大要件であり、唯一の武器だ。況や布教戦線に勇飛すべき吾等宗教家に於てをや。

蓋し洋の東西を問はず、時の古今を論ぜず、最も雄辯家の多いのも、又雄辯の研究せられたのも、宗教家の間に其れを見る。是雄辯の主要なる要素は、信念思想であつて、即ち宗教家は其の信念及び思想の卓越に於て、概して他を凌ぐ爲と、其の教義を宣傳する必要上常に如何にして聽者を感じせしめ得るか云ふ事の研究に苦心する所にあつたからである。

三界の大導師としての釋尊の生涯それは實に不朽の大説教であり、耶穌の有名なる「山上の垂訓」の如き、殊に吾が宗祖日蓮聖人の法華經に對する燃ゆるが如き信仰は、かの「立正安國」の宗教運動となつた。孰れか又不滅の雄辯に非ざる。而も此等の雄辯は區々たる口舌の技巧でなく、實に彼等大聖の崇高なる信念と、深刻なる体験と、聰明なる睿智と、純眞なる情熱とから迸出したる生命そのものゝ大雄辯であつた。然り、理想的雄辯とは實に如斯きを言ふものであるが、然しかく云へばとて雄

辯研究の無必要、耕辯の不用を論ずるのではない。寧ろ自己の思想信仰を聽者に徹底せしむべき方法を研究すべきだ。今や現代日本は非常時局と稱せられ、曾て鎌倉の十字街頭に立つて大雄辯を發揮せられた日蓮聖人の當時よりも、一層「立正安國」の叫びを必要とする時代でなければならぬ。大雄辯家たる日蓮聖人の流れをくむ祖山二百の健兒の使命や實に重大である。

茲に於て本部は沈滞期にある祖山辯論界を曾て時の辯論界に光輝を放てる往時、否其れ以上の辯論界を建設すべく、從來より耕辯の方法組織を變更改革したのである。即ち從來は毎週土曜演説、説教の耕辯を一ヶ處で行つて居たのであるが、今年度からは全學生を三分し、一二年級を丙組、三四年級を乙組、中五以上高二迄を甲組として、而してその各組をA B C Dの四組に分け、本院釋迦堂、高三教室、中一教室に於て、説教を二ヶ處、演説を一ヶ處、各組A B C Dの中當直に當つた者が耕辯する様に組織したのである。案ずるより生むは安く、各部幹事諸兄の盡力に依つて多大の効果を收め得た事は、祖山辯論界の將來の爲に祝福すべきであらう。

不肖本幹事は、祖山二百の諸兄が、願くば八ヶ年の長き星霜に於て鍛鍊された辯論を以て、彼の舌神デモステネスが一身を屏してアテネの都を救はんとした如く、日蓮聖人の魂を己が魂として、行手を失へる此の現代社會に向つて祖山辯論の特色を發揮せられん事を希望するものである。因に本部が五月以降現

在に至る迄の奮闘の跡を略記すれば左の如くである。

五月六日 より八日に至る三日間の釋尊降誕會を期して、身延町に於て道路布教を行ふ。當日の辯士は、

六日 丸山書記、酒井將敬君、北川即正君、末吉元敬君、小崎若雄君。(佐野書店の側に於て)

七日 酒井將敬君、中澤要實君、小浦孝勝君、佐々尾善智君、小崎若雄君、松木辯論部長(佐野書店の側に於て)

松井桓成君、小浦孝勝君、末吉元敬君、梅溪英學君、松木辯論部長(玉屋の側に於て)

八日 中澤要實君、小浦孝勝君、勝部亮運君、近藤存正君、佐々尾善智君、小崎若雄君(佐野書店の側に於て)

松木辯論部長、丸山書記、金川龍恍君、酒井將敬君、落井良昭君、末吉元敬君、今井是觀君、小浦孝勝君、梅溪英學君、佐々尾善智君(玉屋の側に於て)

五月十三日 東京妙宗信行實顯會團參二千人登詣せし爲め、身延町に於て道路布教を爲す。辯士は左の如し。

丸山書記、末吉元敬君、松井桓成君、小浦孝勝君、梅溪英學君、勝部亮運君。

五月廿一日 本年度第一回耕辯會を開催す。説教を釋迦堂に於て乙組(中三中四)が是を行ひ、演説を中一教室に於て甲組(中五以上)、乙組(中一、中二)、合して舉行す。演説の辯士及び

演題左の如し。

一、開會の辭 高二 末吉 幹事

一、宗教化とは何ぞや 中一 鈴木彌吉郎君

一、人間勇氣 中一 片岡 正雄君

一、國難に局面して 中一 竹中 仙市君

一、無頭 中一 前田 茂君

一、宗教任務 中一 田村 啓孝君

一、我等の覺悟 中一 牛居 實君

一、國民的自覺 中一 香川 健二君

一、進軍 高一 端 是信君

一、只佛にならんと思ふばかり也 高二 日置 依法君

一、佛滅年代 高二 幡上 昌男君

一、閉會の辭 高二 中澤 幹事

因に本日松木先生の稿になる説教の琴及び説教に行ふ挨拶のテキストを謄寫して部員に分與せり。

六月三日 第一學期各級選出雄辯大會を午后一時より本學講堂に於て開催、初夏の暑熱にも關らず、盛大裡に閉會す、プログラム左の如し。

一、開會之辭 高二 末吉 幹事

一、論ずべきは体顯のみ 中一 竹中 仙一君

一、希望に生きよ 中二 安松登志美君

一、生命の輝き 中三 高野 教誓君

一、吾等の使命 中四 門田 正孝君

一、祖國の救済は

思想的戒嚴令に在り

中五 古川 宣悅君

一、鶴鶴鳥の歎き

高一 平野 大統君

一、日蓮門下の進むべき道

高二 佐藤 海善君

一、鳥の子は黒い

高三 半澤 經一君

一、挨拶

辯論部長 松木本興先生

一、閉會之辭

高二 中澤 幹事

六月十七日 十五、十六日も宗祖御入山大會に就き道路布教舉行の豫定であつたが、雨天の爲め中止す。幸ひ十七日は好天氣に晴れ、身延町玉屋側に於て開催す。獅子吼せる辯士は左の如し

松木辯論部長、丸山書記、末吉幹事、松井桓成君、小浦孝勝君、梅溪英學君、勝部亮運君、小崎若雄君

十月十二日 宗祖鶴林會に際し、午后六時より例年の如く説教は勿論、幻燈布教龍口法難、一妙曆及び其れに續いて白演「身延聖蹟研究會」由比濱等を舉行した。幻燈解説者並に通夜説教の人々は左の如くである。

金川龍悅君、酒井將敬君、末吉元敬君（以上幻燈解説者）

藤田布教師、松木部長、北川布教師、半澤經一、酒井將敬、谷川寛徳、末吉元敬、日置依法、松井桓成、小浦孝勝の諸氏

（以上説教）

十月廿一日 午后六時より公會堂に於て、立正大學専門部、本

門法華宗尼崎學林、池上學林、東京淨心寺法苑學院、身延男女青年團第八回聯合雄辯大會を開催す。聴衆數百實に盛大なりき。但前日になつて京都光山學院辯士が事情の爲め、不出席の止むなきに至つた事は、誠に遺憾の極みである。因に當日のプログラムを示せば左の如くである。

一、開會之辭

幹事 末吉 元敬君

一、時宗を憶ふ

本學 竹中 仙市君

一、何を以てか聖賢に酬ひん

本學 成田 正學君

一、我等の理想

男子青年 望月文太郎君

一、生命の輝き

本學 高野 教誓君

一、現代の生活問題

男子青年 池田 利長君

一、時局に直面して

本學 加藤 智學君

一、天地人の感恩の生活

男子青年 依田 喜徳君

一、獅子王の子として

法苑學院 吉川 義研君

一、男性への抗議

女子青年 望月千恵子嬢

一、蛇は何故死んだか

本學 古川 宣悅君

一、吾人の信念を語る

池上學林 木村 圓乘君

一、理想と精神文明

尼崎學林 谷口 端鳳君

一、時局の重大化と人類永遠の平和本學

松村 頌運君

一、魂の古里

池上學林 淺野 本悠君

一、現代日本の動向に唯一の

指導原理を興ふるものは何ぞ 本學 畑野 惠仁君

一、所感

男子青年 小笠原清保君

一、吾人は何處へ

本學 酒井 將敬君

一、眞の阿片こそ宗教也

尼崎學林 北野 道治君

一、非常時とニチレニズム

本學 半澤 經一君

一、現代の思想的危機に

立正大學 岡元 鍊清君

於ける純正宗教の提唱

專門部

一、雄辯

本學 藤山 英雅君

一、挨拶

辨論部長 松木本興先生

一、閉會之辭

幹事 長谷川寛慶君

十一月十八日 池上學林雄辯大會へ、古川宣悦君を派遣す。尙此等の外、山内布教、耕辯會、特別布教等を記すれば多けれ共、煩瑣に流るゝを以て省略し、是を以て擱筆する。

〔昭和八年十一月廿五日〕



運動部

幹事 長谷川寛慶

今やスポーツは國際的に發達し若し今昔比較するならば、二十年否十年已前は夢にも思はなかつたであらう、紳士淑女が今は健康其の物の表象の如き身體の殆ど全部を天日にさらし、スポーツの爲には五日や十日は家業を休む。それ程一般が關心を持たれる時勢となつたのだ。オリンピックがそれであり、甲子園がそれなのだ、凡そ若人たるものは家内に神經衰弱の頭をひねらずとも、良く學び良く遊ぶの一語、以て身心の鍛錬に究す

べきであらう。社會文化の中心を行くものは雄辯と文學である、されど健康なき處何の雄辯ぞ何の文學ぞ、由來我々は物心の獨立的存在を認める事は出来ない、言謂『健全なる精神は健全なる身体に宿る』のである。されば先づ「國家を祈りて須らく佛法を立つべし」の國家觀に立脚し、二陣三陣續けよかしの若人たるには、本化別頭の大法を學ぶ事のみ、以て能事足れししては居られない、渦巻く社會の人心を觀、多事多難であらう、將來を思ふ時、眞の意味に於て身心の鍛錬に志さずに居られない、請ふ獎勵を待つな、より進取的なれ、此の意味に於て私が運動部を擔當する様になつてから、或は庭球の他校試合を望む者あり、或はそれが如何に小規模であるにせよ、復案を作て野球の試合を望む等々種々な催があつた事を喜ぶものである。左に其の重なるものを列舉して見よう。

◇旅行部

本旅行部は、別頁旅行記事にある通り、過去三ヶ年の間冬眠の狀態に置かれてあつた。然るに今回旅行募集に際して六十余名の参加者を得た事は運動部の獻身的努力と我々が旅行精神に見覺めた事を物語つて居るものである。

五月十五日旅行を計畫し十八日學校、本山當局へ豫定表呈出、廿二日許可を得、廿三日募集開始、六月五日夜幹事會を開き、諸般の打合せをなす、七日旅行先に依頼狀發送、等非常に忙し、尙詳細は別項東京、鎌倉、富士五山廻りの如し、今は其の繁な

るを恐れて此處に書せず。

◇庭球部

祖山運動部の生命は旅行と庭球であると云つても過言ではあるまい。此の意味に於て、其の生命の大半である。旅行部を大過なく決行したそれに比して割合にふるわなかつた事は深謝にあたえするものである。

五月廿八日午前八時春期庭球大會開催、部員約三十名應援二十名出場し近年になき盛大裡に行はれ、灘上運動部長出場、尙松木辯論部長、今村文學部長の來場あり、午前中紅白・抽籤試合シングル戦を行ひ、午后より、呼物のクラス戦・優勝戦を行ふ、各人全力を盡して奮闘したが優勝旗は、小野灘上組に取られ、クラス戦は中四の勝に歸し、午后五時より記念撮影、茶話會有りて春季大會は無事終了す。成績は左の如し。

優勝戦

シングル戦

抽籤試合

クラス戦

一等 灘上

一等 小野

一等 小野

一等 村上

二等 小野

二等 村上

一等 櫻榮

中四 森本

二等 末吉

三等 畑野

二等 村上

二等 山田

三等 山田

四等 山田

二等 秋山

高三 長谷川

遠藤

末吉

三等 末吉

三等 松木

尙春期庭球大會に際し法主親下より運動奨励の意味を以て金一封を賜はり、北川教潤師よりボール代金貳圓也を寄贈さる、

感謝に絶へず。

十月十五日秋季庭球大會開催。此の日寄宿舎に於て遠足を催し爲に大多數不在。今更變更すべきもなく卅人程の出場比較的小人数であつた、松木辯論部長に出場を乞ふ、次第及び成績左の如し。

松木部長代理

一、開會之辭

一、優勝旗返還

一、紅白戦 紅軍勝

一、抽籤試合 一等山田、加藤二等畑野、松木 三等省略

一、クラス戦 一等高一小野、齊藤二等高末吉、畑野三等省略

一、優勝戦 一等末吉、加藤二等山田、松木 三等省略

一、賞品授與、優勝旗授與

一、茶話

望月部長代理

◇剣道部

六月四日午前八時剣道大會舉行、中條先生に部長代理として出席を乞ひ、部員約卅名出席、四時半盛大裡に閉會、戦績左の如し。

紅白戦 白軍勝

リーグ戦 乙組 一等小野 二等松下 三等齊藤(男)

甲組 一等松野 二等中村 三等望月(義)

優勝戦 一等松野 二等増田 三等中村

尙院長祝下より運動獎勵の思召を以て金一封賜る。

◇卓球部

本部は同窓會運動部へ本年度より編入されたものではあるが従前通り會費徴收制なる爲、會費未納者多く、加ふるに、ネット、バットの粉失するあり、爲に大會を開催するに至らざりしは残念なるも、今回新器具を一式購入して近々に大會開催の予定なり。

尙去る十月末日映南野球大會あり、本學院同窓會員の組織に於ける立正チームも出場なすにより特に獎勵の意味を以て金一封を贈呈す、第一回身延中學寄宿チームとの試合に於て九對〇の好成績を以て優勝せるも、次回青柳チームとの試合に於て惜敗したるは、蓋し練習不足に依ると雖も、残念であつたが、相當實力も認め得る事であり、本部の使命を考え明年より、本部に加入せしめたいと思ふ。

去る廿三日午後一時より本部主催のもとに野球試合を行ふ、出場チームは在院生、寄宿舎、一般通學生の三チームであつた。最後の榮冠は寄宿舎チームであつた、因に本部報は旅行記事と同様に幡野君に依頼する心算であつたが止むを得ざる事情に依りて試験間近に印刷所の一隅を貸りて書した物なれば不完全なる事は論を待たず此の点深謝するものである。尙終りに法主現下には特にスポーツに御理解ある事は度々の獎勵金に依りて明なる處にして又吾等深く感謝の意を表する次第である。(長谷川記)

修學旅行 東京鎌倉富士五山巡り

昭和四年富士五山めぐりをして以來、運動部が幾多の犠牲をはらつて旅行に盡力せられたが水泡に歸し、三年の間、祖山學院の旅行が冬眠状態に置かれてあつた。今春に成つて修學旅行を募集した處、六拾餘名の参加者を得たと言ふ事は運動部の歇身的努力と、我々が旅行精神に見覺て來た事を物話つて居るものである。先づ日程と順路を略記せば

六月九日 身延驛發、中央線廻り

六月十日 新宿着——原宿着(明治神宮)——五反田着——(立正大學)——池上着(池上本門寺)——上總中山着(中山法華經寺)——上野錦泉館にて一泊

六月十一日 東京驛發——鎌倉着(鶴ヶ岡八幡宮)——鎌倉宮——大巧寺——辻說法跡——妙本寺——ぼたもち寺——安國論寺——妙法寺——妙長寺——本覺寺——長谷着(四條金吾邸跡)——光則寺——大觀音長谷寺——大佛——極樂寺着(極樂寺)——龍口寺着(龍口寺)——自由江之島へ

六月十二日 藤澤發——富士着——自動車にて實相寺——大宮着——自動車にて本門寺——正林寺——白糸之瀧——大石寺——妙蓮寺——大宮西町發——身延着——祖師堂前にて讀經の後大客殿に於いて法主現下に無事終了を報告し散會、

六月九日、午後七時二十分頃、我が旅行隊は松木教授、灘上

講師、丸山書記の指揮引率の下に棟神閣前に集合し、宗祖に三日間の安穩無事を祈願し、大客殿前に於いて法主親下の懇篤なる訓話を受け、題目三唱に身延の山を誦かせ、多数の同窓生に送られて、九時六分身延驛を捨て、一路甲府へと向つた。途中車窓の月を讀し、西條の群螢に驚き、何時しか甲度へ着いた。十一時廿分の列車は甲府を後に六十餘名の淡ひ夢を乗せて新宿へ向つた。

明けて十日乗客は濁つた電燈の光の中に夢をむさぼつて居る頃、我々一行が新宿に下車したのは五時頃であつた。

同窓で今立正に笈を負ふ三木、古谷兩君の出迎を受け原宿に於いて先發の丸山、小野の兩君の案内に依つて程遠からぬ明治神宮に大帝をしのび、その莊嚴に打たれ、朝の大氣を滿喫しながら原宿を後に五反田に向つた。

立正大學小林教頭先生、會計の永田師の出迎案内を辱ふして、ゴシック型の校舎の中を縫つてホールに至り昨夜來の疲れを休めた。

大學講堂佛前に向つて讀經の後、化學教室に於いて、二三の實驗に慰められ、續いて大學幹事中條是龍先生の御案内を辱ふして博物室、圖書館其他、種々なる教室、研究室等を見學した。諸先生方には授業前の御多忙にも不抱、種々旅情を慰められし事は我等一行の永へに忘れられない記録と感謝とを新たにすものである。ホールに入つて心からなる朝食に舌鼓を打つて立

正大學を去つたのは丁度九時頃であつた。

九時六分、池上電車の人となつた頃は太陽も大分昇つて、初夏とは思はれぬ程の暑さに成つて居た。池上學林の出迎に感謝しながら案内され、靈山橋を渡つて、有名な此經難持坂に藍汗を流し清め、祖師堂、御開扉、重ねて宗祖御茶毗所の多寶塔、等を參拜し大廣間に於いて心からなる茶菓子に少憩し、直ちに大坊に參拜した。日昭上人の打鳴す鐘は靜かに餘韻を引き、示滅の地震と滿庭の櫻花に聖人泊然として大寂せられたであろう大坊の前に立つた時、私達は何もかも打忘れ心の底から祈らずには居られなかつた。

涙の乾く間もなく池上學林の見送りを辱ふし下總中山へと急いだ。

蒲田、秋葉原、兩國と忙しい乗替の内に中餐を整へ、下總中山驛に下車したのは〇時二十九分であつた。中山學林の出迎を辱ふして法華經寺へと案内された、山門を通過して直ぐ右側に日常上人の銅像が建てられてある、「我れ上行菩薩たらば貴邊は無邊行菩薩なるべし」と大聖人より稱歎せられた開祖日常上人の御姿である。

祖師堂開扉、次いで諸堂を參拜し、大廣間に於いて、杉承壽養尊師、中山學株教授、學生代表等の歡迎の辭に感謝して後、心行くばかり身心の疲れを休めた。少憩の後、近年完成したと言ふ御聖教寶殿の壯大なる建築美に陶醉しながら五重寶塔の傍

に出ると路一筋隔てた彼方に富木殿の乗馬を嗣つた小さな胸形堂があり、其邊りに鬱然たる一本の樹がある是が有名な哭銀杏である。日蓮門下にはれを知らないものは誰人として無いであらう、涼風に戦ぐ葉ずれの音も、昔日の忍泣とも思はれて、涙の内に、唯感慨無量なるものがあつた。

特別の御厚情に依つて荒行堂を遙視し、諸先生、學生諸君の見送を辱ふし、名残を惜しみつゝ中山を後にしたのは午後二時十六分であつた。

三時二十分上野驛前の錦泉館に到着し風呂に旅の疲を流し、快談裡に晚餐の膳に向つた、折柄訪問下されし、武田、守屋、三木、古谷の四兄と語らひつゝ、都の夜は静に更けて行つた。

十一日旅の疲れを一夜の淡い夢に癒して、元氣澆潤錦泉館に於て朝食を濟ませ乗心地良きタクシーに分乗し東京驛に集合したのが七時四十分前であつた。首都を後に車中の人となつたのが午前八時、馴れない旅の事であり常に下駄ばきである私達に靴は禁物である。草履をはいで靴を荷いで乗車した人もあつた、筆者も又其の一人である。遙に横濱を眼め乍ら、宗祖忍難弘通の根據地、嘗ては鎌倉時代の覇府たりし、憧れの鎌倉へ到着したのが午前九時、直ちに宗祖諫曉で名高い八幡宮に詣て靜御前の古を偲びつゝ、刀杖瓦石の忍難地辻説法跡に、松木教師導師にて此經難持と高聲に唱へ有りし日の宗祖を思出し乍ら、本山妙本寺を後に、ぼたもち寺、安國論寺、妙長寺を参拜す、時正に

正午東身延と稱せられる本覺寺に於て、心からなる歡待に感謝し乍ら晝食を嗜め住職貝山師自らの本覺寺由來を聞き一時半頃出發し電車にて長谷に到り觀音尊を拜し其の偉大に驚き光則寺にて少憩日朗上人法華色讀の土宇を拜觀し在りし日の至孝を追憶し、露座の大佛を拜觀し再び電車にて極樂寺良觀の全盛のそれに比して余りにも規模の小なるに采れ乍らも松木教師の施藥院の説明に耳をかたむけ、再三車中の人となり、稻村ヶ崎、七里ヶ濱を絶景を賞でつゝ行合川を渡り、顯本の道場寂光山龍口寺に着き三門前にて記念寫眞を撮影し、本堂に入りて富川僧正自らの開扉並に一場の説明に感謝し直に山上パノラマ台に登り本宗最古と云はるゝ五輪塔を拜し、山上より遙に三原山の煙を見江之島の景を賞し、石段を下りて本化開顯上行再誕を自覺せられた意義深き首の座、石の玉垣の中を拜し、「片瀬ノ中ニハ龍ノ口ニ日運命ヲ止メ置ク事ハ法華經ノ御故ナレバ寂光土トモ云フベキカ」の御遺文を思ひ出しその大慈悲心を思ふ時私達は涙無しには居られなかつた、再び龍口寺に入り心からなる壽司に舌づつみを打つ、宿縁の致す處か當夜は恰も宗祖法難會であつた。自由解散江ノ島見物に出掛けた。棧橋に於て一度目を左轉すれば三國一の富士山の左手に正に日は入らんとする時であつた。

江の島に於ては六月十二日の寒空に海水浴をする元氣者もあつた、勿論筆者も其の一人である。十時江の島驛集合電車にて藤澤へ到着したのが十時半、富士へ向ふべく余りに時間が長か

つた、藤澤驛に於て寢不足の目をこすり乍ら各所に於ける歡待振りの思はざりしに打喜びつゝ收獲の大なるを語り長き待合時間を過す、午前一時藤澤を出發し、富士着午前四時直ちに鹿島館に入て朝食、少憩の後、六時自動車にて實相寺に向ふ、實相寺庫裡に入て直ちに本堂開扉安國論著述に御艱難あらせられたであらう、經藏を開扉し約一時間休憩、茶菓の饗應を受け出發。

二三日來の寢不足にも拘らず元氣な私達を乗せて自動車は菴進する、十一時遠藤教頭先生の出迎を受けて橋本館に入り、教頭先生出資になる心からなる中食を頂戴して、再び高級タクシー六台に分乘して淺間神社發午後一時、本門宗本山本門寺なる富士興門派祖日興上人の墓に詣で、本堂前なる興尊御手植の櫻、並に興尊弟子日尊上人が、興師に勘當せられて毎年御會式に此の石に腰を下して一夜を明したと云ふ。石に夜を明す聖や御命講」と云ふ句さえ残されて居る。日尊上人御腰掛の石を拜し、徒歩にて五、六丁正林寺に六老僧日頂上人の墓を拜し、待たして有つた自動車に乗り、日蓮正宗總本山富士大石寺に到る、開基は南條時光公、御影堂は蜂須賀公寄進、流石に總本山だけに末寺九十六ヶ寺ありと聞く、惣々に大石寺を辭し、白糸瀧へ、白糸瀧にて記念撮影をなし曾我兄弟相談の地音止の瀧を觀賞し、自動車にて左に源頼朝の宿、御陣屋駒止の櫻と運轉手の案内に耳をかたむけ乍ら本門宗本山宗祖大檀那南條公邸跡妙

蓮寺に至り、參拜小憩の後、妙蓮寺を辭し歸路につく。(下ノ坊ハ身延離山後ノ日興上人ノ居所ナリ)

教頭先生には大宮を出て、大宮に歸るまで、終始一貫、常に御案内役の勞をわすらはした。

午後四時半大宮發五時半身延着、自動車三台に分乘し三門着、佛祖三寶並に山内勸請の諸神に向つて、御加護の故を以て、大過なき事を感じ、重ねて直に祖師堂に到り、宗祖に御報告申し上げ、大玄關に於て法主祝下に報告を終り、生等の旅行中祝下の御心中をわすらはしたるを謝し、目出度解散す。

尙今回の旅行に際して補助下されし芳名左の如し、

法主祝下——金一封

本院ヨリ——四十四圓也

立正大學立在中學ヨリ——七十圓也

田中海珠師ヨリ——十圓也

柳井慈要兄ヨリ——貳圓也

特に武田、三木、長谷川、渡邊、原田、古谷、諸兄の訪問をかたじけなうし、特に三木、古谷兩兄に早朝明治神宮、立正大學等見學の案内をなし下され又武田、柳井の兩兄は鎌倉江の島まで御案内下された事を深く感謝する處であります、尙又痛切に感じたるは各寺院共住職自ら一場の口演乃至説明をなし下され又御開扉をして下された事で、此の点深く感謝する次第であります。因に記す。幡野文學部幹事が前運動部幹事であり、

前文學部幹事遠藤君が中途休學したので幡野君が文學部に變更した爲、私が九月十五日より引繼ぎ運動部を擔當する事になりました爲に、運動部記事は元來幡野君に依頼する心算で居りましたが幡野君は本誌校正に多忙な爲、私が代つて本運動部の記事を書きました。従て旅行記事に在ても既に私は其の當事者では無き爲幡野君か又は末吉君（事實は他の役で有つたが名義が記事係りで有つた故）にお願する心算で居たが、末吉君は辯論部記事の執筆に忙しく、幡野君の如きは校正に、日も尙たらざる有様にて、止むを得ず潛越乍ら私が記憶をたどつて旅行記事の後半を書く事になりました。右の如き始末故、不備の点又は過復の点は御許し下さい

（長谷川記）



文學部

幹事 幡野存靜

この棲神を出版する事が、文學部の最大の事業であり唯一の事業である。同時にそれが文學部のすべてでもある。故に部報とても記すべき事がない。顧るに未開の時代を支配したのは武力であつた。劍の力だつた。然し文化の發達と知識の向上は人類をして劍を捨て、而してペンを握らしむるに至つた、今や「筆は劍より強し」である。外交は文書、政治は宣傳戰、商業は廣告戰、そして宗教は傳導戰だ。平和裡の武器は唯ペンあるのみだ。文は人なりと云ふ、然り文は人格である。文の力は遠大である。見よ宗祖の御遺文四百余篇を繙いた時、其處に吾祖の而

實不滅度の人格の躍動を見、且又表現し能はざる當住此説法の感動がある。

斯くの如き偉大なる文筆の力を現代利用して赤の宣傳や、エロ、グロ文學が發達し悪思潮を社會に傳染せしめて居る。而して文學の眞の生命を忘れんとして居る、此の危険な時期に直面し此れを善化せしめる者は誰ぞ？それは祖山學徒に残された大なる任務であり使命であらねばならぬ。然り是れ祖山文學の使命である。此の迷へる大衆に向つて明道を指示し、祖山文學の精粹と信仰信念を發輝して行く「棲神」の發行によりて、宗教文學の眞生命をつかましめ、吾が祖山のみ持つフレツシユな靈氣の中に育くまれたる意氣を持つて敢然救世の陣頭に立ち、大法廣令流布の佛子たる事を示さんとするのである。不完全ながら斯の如き使命を持つ棲神第十九號は菊花薫る今華々しく諸君の机上にまみえるのだ。此れこそ熱血をもつて祖山の面目を發輝せんとする祖山學徒の文學的大飛躍の結晶なのだ。

尙本誌刊行に際し文學部長今村是龍先生の種々御指導と運動部幹事長谷川寛慶君の御盡力の大なる事は實に感謝に堪へない又加藤智學君が自己も忘れて試験前の一刻も無駄につひやしてはならぬ時に不眠不休終始一貫して校正に御助力下されしことを附記して深く其の勞を感謝する次第である。



寄宿舎厚徳寮雜報

松村頤運記

朝に山霞を引いて巍然としてそびゆる鷹取山を迎望し、夕べに薄靄に包まれて行く奥之院を遠望し、玉の碎けて迸り練の裂け纏る如き早瀬の富士川を俯瞰する寺平の景勝地に祖山學院寄宿舎厚徳寮の姿が在る。舊寄宿舎は祖師の御靈廟近く西谷の地にあつた。昭和四年九月創立當時を回顧するに轉た感慨無量である。

先づ順序とし西谷西溪寮時代から辿れば、出来たばかりの寄宿舎西溪寮は未だ電燈の點付がなく毎晩蠟燭を燈してゐたが、その内臨時燈が二ツつき九月××日頃から全室に渡り明るい電燈が點いた時は歡聲を擧げたものであつた。障子や柵入れの戸などの建具は勿論、風呂場がなくて露天に穴を堀り板で風呂桶を造り、セメントで繼ぎ合せ亜鉛板を張つた五右衛門で足を戴いて風呂を樂んだが、お湯が一ぱい張ると溢れて火の消えるのには弱つた、報知木が無くて振鈴で間に合せた。無論食堂等は云ふも愚か、釜、飯櫃、食卓等も整はず、近所から借り集め板の間に御座を敷いて各自に机を持出し、炊事に經驗ある者が腕を振つた御馳走に舌鼓を打つた。思ひ出せば皆んな懐しい過去であつた。然しながら祖山學院の隆盛に隨ひ自然に寮生の數も多くなり寮の狭苦しさを感じ新築の必要に迫まられてゐた時、名古屋市圓頓寺御住職、平賀實榮僧正の奇進に依り現在の如き

完備せる厚徳寮が出来たのである。時宛かも昭和七年陽春四月十二日寮門の枝垂櫻は老松と共に千代の壽に笑みつゝ法主現下初め平賀僧正臨席のもとに落慶式を擧げた。

寮は東谷智寂坊跡で總二階二棟二十四室他に舍監室、食堂、應接室、電話室、閱覽室、浴室、洗面所等總て完備し、爾來此處に約一年間八十名の寮生、和氣霽々の中に、聖訓を遵奉して行學二道に一意不斷の懈怠なきを勤めてゐる。寮は南寮北寮に分れ、祖山學院講師灘上惠教先生を舍監に戴いてゐる。前舍監今村先生が一身上の都合舍監を辭職なされし事は寮の隆盛を前にして實に遺憾であつた。

灘上舍監は寮生と共に起居を同じうせられてゐる。先生は濃厚篤實の師にして慈愛溢るゝが如く、恰も慈母のその赤子に乳房をふくめるが如き温情を以て寮生の御指對に當られて居らるゝ爲に舍内は實に百花爛滿たる春の樂園のその如く和氣霽々として幸福そのものゝ生活である。

次に役員を記せば、本舎設立初代の寮長として寮の規定に依り本年度最上級中より選出を一同に謀りし結果、寮生の德望厚かりし藤山英雅君當選、次点を副寮長二名、山本隆也君、酒井將敬君、之に當る。會計總務は寮生の信頼深しし中村正俊君就任す、運動部今村義忠君、文學部、演藝部は松村頤運君、園藝部を久住龍勝君、何れもその部の發展に努力す。

舎は本山援助の下に總て自治制に一切の内政を行ひ、各室に

室長一名を置き寮生相互の學業助成と親睦とを計り、毎月一回乃至臨時室長會議を開き厚德寮の發展を議す。寮生の本山への奉仕は毎朝十名宛、一日、三日、十三日は全部朝勤、讀書會に出席す。寮生日々の行事は季節によつて多少異りあるも現在實行せることは、起床午前五時（其の日當直は五時）朝勤六時（出缺點呼）朝食七時（食法を行ふ）登校七時半、夕食五時（食法を行ふ）九時點呼（舍監に夜の挨拶）九時以後絕對に外出を許さず、（特別の事情ある時は寮長乃至舍監の許可を得る事）其の他舍の内外の掃除、食堂の整理及び準備には當直を定めて常に清潔を計るを旨としてゐる。畢竟行學の二道も心身の健全に待つべきもの多大なれば寮生の健康を目的として運動部では、卓球部、劍道部、弓術部、角力部、野球部、等の設置ありて寮生の親睦と質實剛健の氣風の養成に努めてゐる。特に野球部では寮生より成るチームありて峽南地方では野球シーズン毎に優勝候補にあるは頼しい事である。文學部では、閱覽室を設け新聞、雜誌等讀書の便を計る。他に寄宿舎小唄あり、現在では寮歌募集をしてゐる。演藝部では毎月一回茶話會を開き各室より一つ宛に余興を演じ一日愉快に面白く過すのである。

大聖逝いて六百五十二年、其の御聖徳の日増しに輝き行くと共に、我等の寄宿舎厚德寮も日進日歩隆盛に向ひ、他日我が宗門を双肩に脊負つて立つべき本化若黨の寮より二陣三陣と引續きて輩出せん事を希望しつゝ此稿を脱す。

以上

追記、厚德寮の爲め、且亦祖山學院の爲め歡喜に堪えないのば、我等の先輩として信頼崇敬する多田慧秀師が、今度副舍監に就任せられ、愈々寄宿舎發展に献身的御盡力下さること、舎生一同は兩舍監の下に協力一致、祖山教學の興隆を契ふ次第である。

◆同窓會文學部寄贈書籍

叡山學報

比叡山叡山學會殿

龍谷學報

龍谷大學内龍谷學會殿

鶴林

池上學林文藝部殿

求道

求道園殿

信人

信人社殿

戰友

東京市遠藤豊三郎殿

◆同窓會文學部寄附者

一金參圓也

東京市 荒木經明殿

一金貳圓也

秋田縣 櫻庭是實殿